

---

**ポケットモンスター ULTIMATE SOUL**

CHOOSE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットモンスター ULTIMATE SOUL

### 【Nコード】

N1086T

### 【作者名】

CHOOSE

### 【あらすじ】

今ここに、ポケモン史上最悪のトレーナーが生まれた。名前はリンク、自分を支配するものは何だろうと消し去る極悪トレーナー。『オレ以外の者を全て跪かせる』という目的で、相棒のヒトカゲと共に旅を始める。『優しくある事』を理念とするグラス、『自己主義』のマリンが加わり旅は3人の個性あるものとなる。

## 1話 史上最悪の主人公（前書き）

今回も小説をまた1つ作りました。もうそろそろ受験生だし、小説はできる限り多く残して後でいっぱい書けるようにしたいです。

この作品はポケモンを原作としていますが、自分でも異質な小説だと思っています。グロいものが苦手な方は、あまり見ないほうがいいかと思います……。ポケモンが原作というのが、余計にグロさを増していますので。

## 1話 史上最悪の主人公

今やポケモンは約650匹存在し、多くのポケモントレーナーがお生まれつつある。いいトレーナーもいれば、悪いトレーナーもいる。今回生まれるトレーナーは、悪いトレーナー『シンク』だ。その誕生は、ポケモン史上最悪といえるものだった。

「逃がすな！何としても、次期ボスとするんだ！」

「しつこいやツらだ、ヒトカゲ！」

シンクはロケット団の中でも屈指の実力を誇る、次期ボスとまで言われた少年である。シンクはロケット団のモンスターボール庫から1個ボールを奪いポケモンを使って必死に逃げていた。もうロケット団の『支配』には、うんざりしていた。支配されるくらいなら、支配してやる。そんな思想のみが、シンクを突き動かしている。

3

「ヒトカゲ、このフロアを焼き尽くせ！」

「カゲツ！」

ヒトカゲは本来礼儀正しく優しいポケモンだが、ロケット団のR2プログラムの影響で悪事に快楽を覚えるようになってしまったのだ。

「ぐあああつ！体が、焼けるう・・・」

ロケット団のしたつぱの多くは、この炎によって皆焼かれていった。シンクはその異様な光景を、さも満足そうに眺めた。

「ははっ、次はマサラタウンのオレの家だ。オレをあんな辺鄙な場所にぶち込んだお礼は、たっぷりとさせてもらっぜクソ親父」

ロケット団トキワ本部は、さっきの炎が広がり瞬く間に燃え上がった。そのビルから、燃えていながら必死に生き延びようとするロケット団員が4、5人出てきた。

「頼む……、助けてくれ……。助けてくれた……。ら、オレから……。取り合ってキミを追いかけるのを、やめさせてあげよう……」

「本当だな？」

既に喋る気力も無いロケット団員は、ただ首を肯かせる。シンクはヒトカゲをボールに戻し、バッグから何か取り出した。

ガチャッ

「テメエのその、上から目線が気に入らねえ」

シンクは助けるどころか、奪った銃で団員の頭を貫いた。

ロケット団のトキワ本部が火災に遭ったというニュースはカントーだけでなく、他の地方にまで波のように渡っていった。ニュースでは、ロケット団の実験ミスとされた。

「まさかコレが、11のガキがやった事なんて思ってねーだろうよ。な、親父」

「シンク、オマエ……」

シンクはマサラタウンの自分の家にいた。父を銃で撃ち、床に這い  
蹲らせていた。シンクの両親は元ロケット団員で、自分達の昇格の  
ために幼いシンクをロケット団に送った。それを憎んだシンクが、  
復讐目的で戻ってきたのだ。

「いいザマだよな、かつて母さんを私欲で撃ったアンタが今度は  
ガキに撃たれるなんてさ」

「くそ、ポケモンさえ出せれば・・・」

ドンッ

シンクは父のボールを持った手を、一発で撃ち抜く。父は苦しみ、  
許しを乞うた。

「すまん・・・」

「今更遅え！」

ヒトカゲを出し、ロケット団アジト同様に家を焼き払った。それを  
見た一人の男が、家にすぐさま向かう。この男こそ、世界でも有名  
なかのオーキド博士である。

「これ・・・は、って大丈夫か!？」

オーキド博士の奔走虚しく、シンクの父は完全に燃え死体も残って  
いなかった。

「・・・誰がこんな事を・・・」

落ち込む博士の携帯に、電話がかかる。相手は助手のモンジからだった。

『大変です！研究所の資料庫が、燃えています！』

「何！？一体誰が・・・？」

電話の向こうで物音がし、電話の相手が変わった。オーキド博士の孫、グラスだ。まだ11歳ながら、ポケモンの知識量は祖父以上。博士の自慢の孫である。

『シンクだよ・・・、アイツが資料庫から必要な分だけ奪って後は皆燃やしたんだ・・・』

グラスはよほどの事が無い限り、絶対泣く事はない。しかし、その光景があまりに酷く惨いものだったのだろう。電話の向こうで嗚咽していた。

『お祖父ちゃん、オレはアイツを追いかけるよ。アイツに、お祖父ちゃんの前で土下座させてやる！』

ブツンと電話が切れ、研究所のほうから1人の少年が猛スピードで走っていく。それを見た博士は、バッグからボールを取り出し、投げて与えた。

「グラス、そいつを持っていけ！きつと役に立つ、ワシを信じる！」

「ありがとう！必ず、アイツを連れて戻ってくる！」

懸命に走るグラスを見て、博士は少し寂しげな表情を見せた。

シンクは1番道路の木陰で、休息を摂っていた。研究所から奪った資料には、全ポケモンの能力表が書かれていた。

「まずはこの辺りで、テキトーに捕まえるとするか」

「待て！シンク、やっと見つけたぞ」

グラスはシンクを見るや、飛び掛っていく。シンクは銃を取り出すが、間に合わず押し掛かられてしまった。銃は手から離れ、遠くまで転がった。

「くそ！離せ、この優男が！」

ドガッ

グラスを蹴り飛ばし、シンクは後ろへ跳び退る。

「ふん、オマエの事だ。この資料を奪われてブチキレてんだろ。でも安心しな、これでオマエはオレを追う必要は無くなる」

シンクはヒトカゲを出し、『ひのこ』を指示した。すると、その『ひのこ』で資料が燃えて地面に黒焦げになって落ちていった。これを見たグラスは涙を浮かべ、悲しみと共に怒りを露わにする。

「オマエエエエエッ！よくもお祖父ちゃんの研究資料を、燃えカスにしたなあ！こうなったら、ポケモンバトルでオマエを倒してやる！！」

「上等じゃねえの、やってみろ！」



グラスはフシギダネ、シンクはヒトカゲを繰り出した。ポケモンバトルの始まりだ。

「フシギダネ、『やどりぎのタネ』！」

「無駄だ、ヒトカゲ『ひのこ』だ」

フシギダネはくさタイプ、ヒトカゲはほのおタイプ。相性は不利な上、グラスは怒りで冷静な判断を失くしていた。これを好機と見たシンクは、ヒトカゲに指示する。

「ヒトカゲ、『ひっかく』攻撃！」

爪を立て、ヒトカゲはフシギダネに向かった。グラスはフシギダネに、『たいあたり』を指示した。

ドガア！

「カゲツ、カア・・・」

ヒトカゲは『たいあたり』を真正面で受け、ダメージを負う。が、これはシンクの作戦である。

「よし、ヒトカゲ！最大パワーで、『ひのこ』をかませ！」

ボワアアッ

強烈な炎の一撃、フシギダネはダウンした。シンクはあえて攻撃をヒトカゲに喰らわせ、至近距離になったところを攻撃させた。しかもとくせい『もつか』が偶然発動し、『ひのこ』の威力は絶大なも

のとなったのだ。

「ダ……ネ……」

「フシギダネ！しっかりしろ、立つんだ！」

「立てるわけねえさ、ゼロ距離であんなもん喰らったんだ。諦めな」

シユルル、ガシイ

シンクは突然、右腕を何かに巻きつかれた。緑の紐状の物体、フシギダネの『つるのムチ』だった。

「ウソだろ？なんでまだ……ぐうう！」

「カゲエツ……」

フシギダネはもう1本のムチで、ヒトカゲを縛り上げる。ヒトカゲは耐え切れず、気絶してしまった。とくせい『しんりよく』が発動したフシギダネのわざは、凄まじいものだった。

「ちっ、戻れヒトカゲ！……ぐああっ、腕が折れる……」

シンクは落ちていた銃を辛うじて拾い、グラスのほうへ向ける。グラスは動じず、フシギダネにわざを指示した。

「フシギダネ！『やどりぎの」

パアン

銃弾が放たれた時、グラスを誰かが庇い銃弾を受けた。そしてその影は、ゆっくりと倒れる。

「お、お祖父・・・ちゃん？お祖父ちゃん！何してるんだよ、そんなヨボヨボな体で！！」

「ヨボヨボ・・・言うな・・・」

シンクは『つるのムチ』でのダメージで、若干急所からずらされ博士は助かった。

「くそ、悪運の強いヤツらだぜ」

シンクはその場から、逃げ去っていった。グラスは改めて誓う、『絶対アイツの好きにはさせない』。

シンクは腕の手当てをするため、ポケモンセンターで包帯をもらっていた。

「オレの理想は、あの日から変わらない・・・。『オレ以外の者を全て跪かせる』。そのためにまずはジムリーダー達や四天王を力・・・ねじ伏せる！」

シンクは腕から血が出るほどに、包帯を強く巻いた。



## 1話 史上最悪の主人公（後書き）

この小説では、シンクはポケスペのレッド的位置、グラスはグリーン的位置となっております。まだ登場していないマリンは、ブルー的位置を担っています。

## 2話 破壊のムサシ(前書き)

まったく、明日テストなのに何してんだかな？オレWWW。

## 2話 破壊のムサシ

シンクは、心の底からこみあげてくる苛立ちを隠せないでいた。幼馴染みのグラスに、一撃で負けてしまった事のショックが苛立ちとして現れているのだった。

「くっそ、アイツめ……。何であんな……。イヤ、アイツも成長したってワケかよ……。あの泣き虫の、世界の底辺が……。笑える話だな……」

シンクは起きて間もない体を、無理矢理立ち上がらせる。ポケモンセンターから出て、最初のジムがあるニビシティを目指した。

「ヒトカゲ、『ひのこ』だ」

「カゲエ！」

シンクは出会うトレーナー全員に、ポケモンバトルを挑んだ。今のシンクを止められる者はおらず、全員一撃で倒された。

「まったく、どいつもこいつも……。もっと腕のあるヤツはいねーのか？」

「じゃ、アタシが相手しようか。イカレ小僧の、次期ボスのシンク様」

聞き覚えのある声に、シンクは後ろを振り向いた。そこには、長い髪をなびかせる長身の美女がいる。シンクはその姿を見て、微笑した。

「ロケット団幹部、『破壊のムサシ』。相変わらず見た目は、死ぬほどキラーだぜ。バトルの実力も、相変わらずだろうけど。相方さんはどうした？『封殺のコジロウ』は、何処へ消えたんだ？」

「抜け抜けとよく言う、コジロウは本部の早期修復の指揮を執つてるよ。まったく、次期ボスとあるう者が本部を焼くなんて……。ロケット団の恥は、アタシが雪ぐ！」

ムサシはボールから、スピアーをくりだす。シンクにとって、相性バッチリだ。

「ヒトカゲ、一気に決める！『ひのこ』！」

「スピアー、『とんぼがえり』！」

スピアーは『ひのこ』を掻い潜り、ヒトカゲに接近する。が、ヒトカゲも攻撃をかわして両者のわざは不発に終わった。スピアーは『とんぼがえり』で、ムサシの持つボールへ戻っていく。

「2体目！出でよアーボック、『へびにらみ』！」

「ヒトカゲ！目を見るな、体が痺れるぞ！」

ヒトカゲは咄嗟に目を隠し、アーボックの攻撃を凌いだ。が、このスキを突かれ能力アップのわざ『とぐるをまく』を使われてしまった。

「一気に破壊しにくるな……。ヒトカゲ、アーボックの頭に『ひのこ』だ！」



「カゲエエエ、カゲッツ！」

ボボボオ、ボボボボ！

ヒトカゲは全力で『ひのこ』を吐き続けるが、アーボックは応えていない。それでもシンクは、ヒトカゲに『ひのこ』を指示した。

「何のつもりだい？それでも次期ボスだったヤツ？アハハ、笑わせろっ」

ムサシは高笑いし、アーボックに攻撃を指示した。『とぐるをまく』で限界まで能力を高め、わざの威力は相当なものになっている。もし喰らえば、一撃でダウンだ！

どぎああっ

「シャボツ！？」

わけもわからず、アーボックはヒトカゲの目の前でおもいきりズッコケた。無論だが、こんらん状態には陥っていない。ムサシは何がどうなってるのか、整理できないでいた。

「な、何で！？アレなら確実に攻撃が当たって、確実にアタシの勝ちなのに！」

「ふん、ロケット団幹部がポケモンのポの字も解らないとは……。いいぜ、ポケモンバトルを理解してねえアンタに解りやすく教えてやる」

シンクは饒舌に語り始めた。

「アーボックやノコッチ、ジャローダなんかのへびポケモンは、頭のピット器官つてヤツで方向感覚を感じてるんだ。それを攻撃されたら、どうなる？今みてえに何でもねえ場所ですっこけるし、こけても方向感覚がねえせいで起きる事もムリだ。もうアンタのアーボックは終わりなんだよ、いけヒトカゲ」

ヒトカゲは『ひのこ』を、アーボックにぶつけた。アーボックは耐えきれず、倒れる。

「シャツ・・・ボ・・・」

「ちっ、いけスピアー！『どくづき』を連発よ！」

スピアーはヒトカゲに連続攻撃を仕掛けるが、全てかわされた。その威力はかなりのもので、地面には小さい園児が入るくらいの穴が開いていた。

「ヒトカゲ、スピアーの腕の真ん中に『ひっかく』攻撃！」

ザクッ

「スピイー！」

スピアーの左腕が取れ、地面にどさつと落ちる。腕が千切れるといふ壮絶な痛みを受け、スピアーは地面に這い蹲った。

「スピアー！飛びなさい、飛ばないとアンタも死体廃棄場行きよ！」

「スピッツ!?・・・スピスピィ・・・」

スピアーはふらつきながら、立ち上がる。シンクは高笑いし、攻撃を指示した。

「ふん、ヒトカゲ『ひの」

ドンッ

刹那、一発の凶弾が轟音と共にシンクの腹を貫いた。シンクは、腹から血をたらたらと流していた。

「ムサシ・・・、よくもっ・・・うっあ・・・!」

ムサシは飛び上がるスピアーの後ろから、銃で狙い撃ちしたのだ。スピアーがよろめいたせいで、急所から反れている。しかし、シンクをダウンさせるには充分だ。

「やれスピアー!」

ドスッ

「カゲッ!」

動揺しているヒトカゲに、スピアーは容赦なく攻撃した。ヒトカゲはよろめき、片膝を付く。シンクは残り少ない体力を振り絞り、掠れ声でヒトカゲに言った。

「ヒトカゲ・・・、オレ・・・の事は構うん・・・じゃねえ・・・。」

スピアーを……、ムサシ……をたお……すんだ！……闘いつてのはな、……強いヤツが勝つんじや……ねえ……。勝つたヤツが！……強いんだよ……！闘いの果てに……立って……んのが、正義なん……だ！」

シンクは意識を失い、その姿と言葉を刻んだヒトカゲは覚悟を決めた。

「カゲツ、カアアアツゲエエツ！！」

ゴオオオオウウ

「なっ、『かえんほうしゃ』だと！？」

燃え盛るスピアーごと向かってくる業火の波を、ムサシは間一髪でかわす。ヒトカゲは覚悟の末、大技『かえんほうしゃ』を覚えたのだ。全てを捨てても絶対に勝つという、強い覚悟が成せる事だ。

「スピアー……、くそっ！」

ムサシは怒り、銃口をヒトカゲに向ける。が、ヒトカゲの覚悟を持った目を見て引き金が引けなくなってしまうた。

「カゲエエツ！」

ムサシはヒトカゲの『かえんほうしゃ』を、銃を捨ててかわした。その銃は原形を留めておらず、グジュグジュの液体と化していた。

「次は殺す、覚えてなさい……」

ムサシはこの戦場から逃げていった。

シンクは気が付くと、ポケモンセンターの宿泊室のベッドにいた。意識が無かったので、誰に連れられたか解らない。だが、助けてもらったのは確かである。

「へっ、ラッキーだなオレ。ポケモンセンターの宿泊代はかなり高いからな、助けてくれた人に感謝しなくちゃな」

「オマエに感謝なんてされたくないな、シンク」

シンクを助けたのは、なんとグラスだったのだ。祖父の仇をポケモンセンターまで連れてきて、宿泊代までも払ってまで助けたのである。

「ははっ、テメー変わんねーな。どんな悪人だろうが、困ってたら助けやがる。んで、オレに謝れって言いに来たんだろ？解ってるよ、謝るから」

「別にいいよ、お祖父ちゃんも許すって言ったし。偶然の偶然で、オマエを拾ったんだ」

グラスは溜め息をついて、シンクに近づく。シンクは少し後ろへ下がった。

「オマエ一人で旅するのか？寂しいなオイ、オレも混ぜるよ。目指す場所は同じだし、いいだろ？」

「あ？何言ってるんだ、オレはテメーの祖父さんの仇なんだぜ？ふざけてんのか？」

シンの返答も当然である。仇の人間と旅をしようなんて、普通は思わないものだ。しかしグラスは、仇などは問題視せずありのままに言った。

「オレの脳みそはオマエと違って、仇とか復讐なんかに縛られないんだよ」

「・・・あっそ、じゃあ好きにすれば？」

こうして2人は共に旅をする事にして、最初のジムがあるニビシテイへ歩き出した。

## 2話 破壊のムサシ（後書き）

今作品のムサシは割りとしリアスにしてみました。

### 3話 初ゲット(前書き)

テストの最中に、何をしとるんだオレはWWW  
3話目、見て下さる~~~~い。



### 3話 初ゲット

前回、共に旅をする事に決めたシンクとグラス。2人は最初のジム、ニビジムを目指すためトキワのもりを進んでいた。さて、トキワのもりと聞いて想像するものといえば……。『ピカチュウ』だ！ゲームでもトキワのもりで必死こいて、ピカチュウを探し回った者は多いハズだ。ましてリアルなどときたら、トキワのもりはトレーナーが芋洗い状態である。このピカ好き共め。

「言っておくが、ピカチュウをゲットしよーなんて気は起こすなよ。カントーポケモン保護法に11歳で引つかかるのは、マジ勘弁だからな」

ピカチュウは現在絶滅危惧種として、保護法で捕獲禁止とされている。しかし密猟者が後を絶たず、ピカチュウの数は日に日に減少しているのだ。グラスは、茂みから出てきたキャタピーを捕まえた。

「シンク、始めなんだからそんないいポケモンを捕まえよう……。なん……。て……。」

「ヒトカゲ！『かえんほうしゃ』で、隠れたピカチュウを炙り出せ！」

シンクは法など微塵も考えず、ピカチュウ捕獲にのりだす。グラスは慌ててシンクを止めるが、振り払われてしまった。ヒトカゲの『かえんほうしゃ』は、瞬く間に茂みを黒こげにした。私利私欲な人間による、醜悪な環境破壊である。

「ピッ……。ピカッ、ピカッ」

「ヒトカゲ、少し弱めに『かえんほうしゃ』だ。殺すんじゃないぞ、捕まんねえから」

ボワ~~~~ッ

少し弱めの『かえんほうしゃ』が、ピカチュウに直撃した。待ってましたとばかりに、シンクはモンスターボールを投げた。

コロロ・・・コロロ・・・ポンッ

「やりい~~~~！ピカチュウゲット、やっぱ上手いなオレ」

ドルルルルル・・・ギヤギヤアッ！

悪事をする者は子供だろうと無関係、それがポケモントレーナーだ。ジュンサーが高速で突っ走って、シンクに手錠を掛ける。

「何すかジュンサーさん、単にポケモンゲットしてただけでしょ？オレ。違反なんて何も」

「黙りなさい！自然破壊に、ピカチュウの捕獲。懲役は最低でも3年だわ、来なさい！」

バキンッ

シンクの手錠が一瞬で、地面にポロリと落ちた。ヒトカゲが『ひっかく』攻撃で、手錠を壊したのだ。（もっといい素材の手錠があるだろうに）

「ナイスヒトカゲ、あと1つ仕事があるが頑張れるな？」

「トレーナーがトレーナーなら、ポケモンもポケモンか・・・」

トキワのもりはトキワシティの管轄なのだが、ロケット団の圧力でトキワ警察には雀の涙以下の資金しか恵んでこないのだった。

「あゝあ、オレ知らないぞ」

シンクVSジュンサー、使用ポケモン2体のポケモンバトルが始まった。

ジュンサーは最初にワンリキーをくりだした。とくせいはこんじよう、ピカチュウとはとくせい上あまり相性はよくない。シンクはヒトカゲを先頭に立たせた。

「ワンリキー、『にらみつける』！」

「カゲ・・・」

『にらみつける』を受け、ヒトカゲは怯えて防御が下がってしまった。

「ワンリキー、『からてチョップ』よ！」

「ヒトカゲ、『かえんほうしゃ』をぶつけてやれ！」

ヒトカゲはぶっ切れ、ワンリキーに『かえんほうしゃ』を浴びせる。ワンリキーは全身でそれを喰らい、10メートル以上飛んでいった。

「リキイイ・・・」

ワンリキーは倒れ、ジュンサーのポケモンはあと1体となった。ジュンサーがどんなポケモンを出すのか、シンクは予想していた。

「ヒトカゲ、ご苦労さん。ピカチュウ、初バトルは『でんきシヨック』で幕開けだ！」

「あっ、しまった！」

ジュンサーのポケモンはピジョン、つまり相性は最悪。『でんきシヨック』はこうかばつくん。出すと同時に指示されては、既に出してしまったピジョンはかわしようがない。

バチイイイ

「ピジヨオオッ！」

ピジョンは電撃を喰らうが、まだ空を羽ばたいている。流石は警察のとりポケモン、タフである。

「ゲームじゃ急所で一発なのに……。リアルはやっぱ、こうでないとな」

「ピジョン、『すなかけ』で目潰しするのよ！」

ザザッ

『すなかけ』で目を潰されたピカチュウは、ピジョンの位置を捉えられなくなっていた。ジュンサーはすかさず畳み掛ける。

「『でんごうせつか』、『でんごうせつか』、『でんごうせつか』よー！」

ドガア、ドオオン、ドガッ

「パイ・・・カ・・・」

「くっそ、警察<sup>サツ</sup>が狡い真似しやがる・・・」

ピカチュウは防御力が特に低い、あと1発喰らえば、確実に倒れてしまう。

「ピジョン、『でんごう・・・。。。。。。！?』」

突然、ピジョンの様子が変わった。羽がぎこちなく動いており、辛そうな表情をしている。シンクは、不敵に笑った。

「発動したか、『せいでんき』！ジュンサーさん、アンタのピジョンは麻痺って使えねーぜ」

その直後にピカチュウは視力を取り戻し、ピジョンを捉えた。

「ピカチュウ！『でんきショック』だ！」

バチバチイー！！

「ピジョ〜〜〜」

ピジョンは倒れ、ジュンサーの手持ちは0となった。この勝負は、シンクの勝ちである。

「うふふ、コレで勝ったつもり？やっぱり子供って甘いわ、大人から見ると反吐が出るくらいに！」

ドルルル・・・ドルルウ・・・ドルドルウウン・・・

「マジでか！？どうすんだよシンク、逃げ場無いじゃん！」

あらかじめケータイを通話状態にしておき、他の警官にも連絡を入れていたようだ。ジュンサーはもしものために、手を打っておいたのだ。ピカチュウはさっきのバトルで疲れており、ヒトカゲもこの数では押し切れない。頼れるのは、ガラスのポケモン達だった。

「グラス、フシギダネのわざ『ねむりごな』でコイツら全員眠らせるんだ。後の処理は任せな」

「フシギダネ・・・『ねむりごな』だ！」

パアア~~~~ッ

フシギダネは背中から、緑色の粉をばら撒く。コレが多くのくさたイプが使う『ねむりごな』だ。グラスはすぐにフシギダネを戻し、ニビシテイの方へ走っていった。

「しまった・・・」「うう」「ああ・・・」

どさぞっ

シンクはジュンサー達が眠っている隙に、ジュンサー達に液体を飲ませた。そしてシンクも、グラスを追ってニビシテイの方角へ走っ

ていった。

シンク達がとうに森を抜けた頃、ジュンサー達は目を覚ました。

「あれ？ワタシ達何で、こんな森にいるの？」

「さく？いつもの見回りじゃない？」

ジュンサー達には、記憶が無かった。さっきシンクが飲ませた記憶制御薬の効果が、ジュンサー達に効いているのだ。普通は薬は何度も飲むものだが、濃度を極端に高めたので1発で効果が出る劇薬と化していた。

「とりあえず、署に戻りましょう。署長が怒って待ってるから」

案の定、署長に怒られた。職務の放棄は署長にとって、何よりも許せない違反だ。ジュンサー達は、1週間のポケモン取り上げを強制された。

「ふん、最近の若い連中は・・・」

署長は終始むすっとしていた。

#### 4話 ニビジムの闘い(前書き)

テストようやく終わった〜!!



#### 4話 ニビジムの闘い

トキワのもりを抜け、ニビシティに辿り着いた2人はポケモンセンターに泊まる事にした。時刻は午後11時、もう少しで日が変わる。

「なあ、ジム戦どっちからする？オレは後でも構わねーぜ」

「ふ〜ん、オレを最初にやらせてジムリーダーの戦術を見ておこうってワケか。解ったよ、オレが最初にやってやるよ」

2人はジム戦の作戦を日が変わっても練り続け、外が明るくなってきた。2人はようやく自分達が寝ていない事に気付き、仮眠をとった。

ジム戦、相手はいわタイプを使い手タケシ。昨日どおり、グラスが最初にバトルする事になった。

「はっははは！オレはタケシ、このニビジムを預かるジムリーダーだ。オマエなんて、1分以内に叩き潰してやるよ。オレはジムバッジを賭ける、オマエは今の所持金全てを賭けてもらおう！」

「アンティールール、か……。いいよ、オレの所持金3万2552円を賭ける！」

アンティールールは、互いに何かを賭けて勝負し勝者は賭けたものを貰えるというルールだ。グラスは金を賭け、タケシはジムバッジを賭けた事になる。

「いけっ！イワーク、オマエの力を見せつけてやれ！」

「グオオオオッ！」

イワークの巨体が、バトルフィールドの半分近くを占領した。タケシは自他共に認める、イワーク愛好家なのだ。

「行って来いバタフリー！いわタイプのわざに、気をつけるんだ！」

グラスはバタフリーをくりだした。お解りだと思うが、トキワのもりで捕まえたキャタピーが一晩でバタフリーになったのだ。むしタプのポケモンの進化の速さは、他のポケモンより群を抜いている。

「イワーク、『いやなおと』だ！」

「『ねんりき』で軌道をずらせ、バタフリー！」

キュンッ

『いやなおと』の波動は、『ねんりき』によってバタフリーの頭上に当たった。まずは互いに様子見、仕掛けるのはもう少し先だろう。

「イワーク！もう一度『いやなおと』を、バタフリーにかますんだ！」

「バタフリー、今度はかわして『ねむりごな』だ！」

『いやなおと』はまた外れ、壁に当たった。バタフリーの『ねむりごな』は、イワークに一直線。タケシは動じず、イワークに指示した。

「イワーク、『すなあらし』だ!」

ブアアアッ

「しまった! 『ねむりごな』が……。しかも砂嵐って事は、いわタイプが有利に立つ……」

イワークは『すなあらし』を使い、『ねむりごな』を吹き飛ばしたうえに自分に有利なほうに持っていったのだ。そしてまだ、攻撃は続く。

「イワーク! 『がんせきふうじ』で、バタフリーを止める!」

「グオオオオウ!」

砂嵐なので、タケシも中の状況は見えないハズだがそこはトレーナーの経験で、どうにでもなった。イワークは砂嵐の中でも、バタフリーを捉える事ができる。バタフリーの羽から出る鱗粉が、砂に反射して光っていた。砂嵐のダメージでバタフリーは動けず、イワークの格好の獲物にされた。

「フリーイイ!」

ドゴオオオ!

バタフリーは砂嵐の外へ投げ出された。そこに、イワークの『がんせきふうじ』が飛んでくる。

「いわタイプのわざは、バタフリーには4倍だ! コレで終わりだ」

ドドドド・・・グシャアツ

バタフリーは全身をズダボロにされ、更には岩に押し潰され無惨な姿にされた。グラスは大泣きした。

「バ、バタフリー！何だよ、アソコで追い討ちみたく『がんせきふうじ』を使わなくてもバタフリーは倒れて、イワークの勝ちだろ！」

「ふん、いわタイプのジムにむしタイプを持つてくるオマエが悪い」  
グラスは涙でぐちゃぐちゃの顔を真っ赤にして、タケシのほうへ向けた。バタフリーの死が、グラスにとってそれ程までに重かったのだ。

「それでも、それでも！ジムリーダーかよ！！フシギダネ、『つるのムチ』で攻撃しろおお！」

グラスはボールを高く投げ上げ、フシギダネをくりだした。

「おいおい、グラス泣かせちゃったよジムリーダーさん・・・。グラスは泣くと、極端に戦闘能力が上がるんだよね・・・。ゲームでも、リアルでも」

シンクは頬杖をついている間に、グラスの涙の猛攻が始まった。

バシィ！スパンツ、バシバシッ！

「フシギダネ！バタフリーの死を、無駄にするんじゃないぞ！！」

「ダネダネエ！！！」

フシギダネはバタフリーの無惨な姿を見て、奮起していた。闘いは常に命を賭けるもの。このバトルでは、それがよく思い知らされる。

「イワーク！かわ」

「グオオオウ……」

ズズウウン……

グラスはタケシに、指示する暇を与えなかった。イワークは4倍のダメージを何度も受け、地面に倒れた。しかし、タケシは微笑する。

「はっはは……、オマエそんなんじやな、この非道な世界で生きるなんざ無理だぞ。命が1つ消えたくらいで、大泣きするなよ。どうせ命なんてな、毎日無くなっていくものさ」

この言葉に、グラスは激怒した。

「命なんてだと！？アンタ、命つてもんを解つてない！命の重さも知らないヤツが、よくジムリーダーになれたなオイ！命が大切だから、人やポケモンはそれを守って必死に闘ってるんだよ！命が惜しいって感じるから、人は生きてる実感があるし充実感を持って世界を見れるんだ！アンタその歳になって、そんな事すら解らないのか！？」

「解ってるさ、そんな事とつくにな……」

タケシは呟くと同時に、2体目のイワークをくりだした。しかも今

度は、1体目より体が一回り大きい。その巨大さは、ほとんどのトレーナーを圧倒するものである。

「さあ、オレもオマエも残り1体。決着をつけようか、優男くん」

タケシはイワークをくりだし、早速わざを指示する。フシギダネも戦闘モード、やる気満々だ。

「イワーク！ 『ストーンエッジ』 ！ ！ 」

「フシギダネ、 『つるのムチ』 で全部叩き落せ！」

ズドドドドッ！

『ストーンエッジ』 をフシギダネの 『つるのムチ』 が1つ残らず地面に落としていく。達人同士の闘いに立ち会っているかのような、そんな感覚がしてしまう。

「ダネッ」

フシギダネの奮闘虚しく、 『ストーンエッジ』 を全て落とす事はできずに5、6発当たった。

「イワーク、 『じしん』 攻撃を見せてやれ！」

ゴゴゴゴゴゴ！

『じしん』 の振動は、ジム中に響き渡ってあちこちで崩れる音がした。フィールド上は小さな渓谷と化し、フシギダネは身動きがとれない。

「イワーク、『りゅうのいぶき』でフシギダネを痺れさせる」

「グッオオオウ！」

『りゅうのいぶき』の黄緑の閃光が、フシギダネに直撃した。『りゅうのいぶき』は3割の確率で、相手をまひさせる厄介なドラゴンタイプのとくしゅわざだ。

「『やどりぎのタネ』で、体力を吸い尽くしてやる！」

シュルルッ、グググ・・・

『やどりぎのタネ』がイワークを縛り上げ、体力を吸っていった。イワークはもがき苦しみ、悲鳴を上げ続ける。今が攻撃のチャンスだが、グラスは攻撃を指示せずイワークの苦しむ姿を見た。

「グウウ、オオオ！」

「言ってる割には、趣味が悪いな優男くん。イワークの苦しんでる姿を黙って、何も感じずに見ているつもりか？」

タケシの質問に、グラスは首を横に振った。

「アンタじゃないんだ、そんなワケないだろ。宿り木に体力を吸われ続けて、イワークはいずれ倒れる。そんな状態で攻撃したら、さっきの・・・バタフリーみたいになるだけだよ」

グラスの答えを聞いたタケシは、バトルフィールド中に響き渡るくらいに高笑いし始める。

「はっは、はっはは、はっはははははは！甘いんだよ優男く〜ん、オレのポケモン達がそんな軟なワケがないだろうが！〜イワーク、『すてみタツクル』！」

「グオオオオツッ！！」

イワークは力を振り絞って、フシギダネに向かって突っ込む。顔面にモロに入り、フシギダネは壁まで吹っ飛ばされた。その衝撃で宿り木も外れてしまった。

ドガンッ

「フシギダネ！」

フシギダネはふらつきながらも、立ち上がる。タケシはそのスキを逃さず、イワークに攻撃させた。

「これでオマエの負けだ、『すてみタツクル』！」

「確かに、オレの負けだよ」

グラスは静かにそう言い、涙を見せる。そして、涙を拭いたグラスは驚愕の行動に出た。

「よせグラス！死んじまうぞ、やめろおおお！」

「なっ、アイツまさか！」

ドゴオオオン！



なんと、ふらついたフシギダネの身代わりに『すてみタツクル』を受けたのだ。これにはシンクやタケシ、フシギダネとイワークも驚きを隠せなかった。

「う……ぐっ」

「フシッ！フシフツシ！フ……シイ……」

フシギダネは悲しみ、悔やんだ。自分の主に守られた事、自分の主を守れなかった事がフシギダネの心を深淵の底に落とした。

「はっはは、バカが。そんなヤツを守って死ぬとは、アイツ人間じゃないな。まさに聖者だよ聖者、気持ち悪くて食べたもの戻すくらいいな」

ゴオオオオツ

突然、炎の塊がイワークを襲った。シンクがヒトカゲに、『かえんほうしゅ』を指示したのだ。

「テメエ、グラスを聖者なんかと一緒にすんじゃねえぞ……。聖者は確かに気色悪いもんだが、コイツは断じて聖者なんかじゃねえ！聖者なんてな、自分の正義と価値観にしか生きれないバカだけだな！コイツは自分の正義とか価値観じゃなく、単に助けたい、優しくありたいって、世界中の人間の大多数が思う事を現実でやっただけだ！！タケシ、オマエバッジ2つと自分の命賭ける！オレはこのポケモン達と、自分の命を賭けて闘ってやる！！」

「なら1VS1、ガチバトルといこうか！」

シンク、真の怒りをタケシにぶつける！

#### 4話 ニビジムの闘い（後書き）

今回、バタフリーが死んでしまいました・・・。  
グラスは果たして大丈夫か！？次回、大注目してください！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1086t/>

---

ポケットモンスター ULTIMATE SOUL

2011年10月8日20時43分発行